研修会

いのちを見つめる自然観察

佐口 美智子(千葉市)

日　時：2019 年 8 月 12 日(月・休)　9 時 30 分～15 時　　天気：晴 時々小雨
場　所：千葉市生涯学習センター 千葉公園（千葉市）
講　師：菅井啓之氏（京都光華女子大学 こども教育学部教授）
補助スタッフ:岡本祐佳(京都府公立小学校教員) 山本万莉菜(京都市公立小学校教員)
参加者：指導員 21 名
担当指導員：佐口美智子 八木千里 山田益弘

一日を通して解ったことは「自然観察指導員は子どもたちが豊かに生きるための案内人でもある」ということです。子どもたちが何度も自然の中でいのちを見つめることで、感性や洞察力が育ち、それがＡＩに頼るのではなく、自分で考えて生きていく力となること。そのために自然と出会わせるのが指導員の役割であること。その時に感性や洞察力を引き出すには指導員のつぶやきが大事であることを学びました。でもつぶやき方は私自身の観察力を高めねば発揮できるものにならないと思いました。

午前の観察会では先生も補助スタッフもよく写真を撮っていました。説明をしながら瞬間的にシャッターを押しています。この行動にも意味があると感じました。彼らの心を動かした生きもの、いのちの輝きを感じたものにレンズを向けているのです。また、よく声を出します。「タマネギだ！」「子連れだ！」「村みたいに並んでいる～」と、自然と触れる楽しさを言葉で表現していました。見たことを自分のものにしていく様子が示されていました。能く観察させるための誘いとして私は受け止めました。

先生は次々と言葉を投げかけます。説明はなし。答えは求めない。ひたすら参加者の探求心をくすぐります。その言葉の中に自然を見る視点が明確に示されていました。

名前を教えることで終わるのではなく、このように指導員が積極的にわくわくしながら行動したり、「きれいね～」とつぶやいて心に響く見方を指導したりすることで、子どもは生きていく力を育むそうです。学ぶことは真似ること。言い換えれば、子どもたちは指導員の導きで自然から生き方を学んでいるというのです。

能く見るための仕掛けとして、黒い布(習字で使う下敷き)と市松模様の布が用意されました。それを舞台にして観察対象物が置かれただけで、私の観察意識は高まりました。

参加指導員からは、普段の観察会を振り返る機会となった、指導員が感動する姿を自分から見せられるようにしたい、大人の観察会にも取り入れたい、足元の小さな世界に気づき、大きな世界を想像していきたい、最初から最後まで感動だったなどの感想が寄せられました。

講師:菅井啓之氏

千葉公園 小雨の中での観察

市松模様の舞台に自然物を置く